

[研究ノート]

表象が「社会的である」とはいかなることか —— S. モスコヴィシの社会的表象理論の検討を通じて ——

熊谷 有理

1 さまざまな社会的表象

—表象が「社会的」になるためのいくつかのルート—

S. モスコヴィシによって1960年代に提唱された社会的表象理論（以下、SRT）は、É. デュルケムの「社会的表象 (*représentations sociales*)」概念を心理学へ回復することで、人々の間で共通の有意義な経験が構成される過程に焦点化する。そのことによってSRTは、人間の心が社会的な世界から切り離せないことを強調する「心理学における社会的転回」を主導する理論の一つに数え上げられている⁽¹⁾。しかし、社会的表象という言葉は論者たちによって様々な仕方で用いられており、この言葉を用いて展開される議論において何が主題化され、分析対象となっているのか、この言葉を通してどのような発想が提出されているのかについて、統一した見解は得られていない。とりわけ表象に「社会的」という形容詞を付与することで何が意味されているのかという点は、社会的表象という概念を用いて共通の有意義な経験の構成について述べてきた他の諸理論とSRT研究との相違を明確にするために重要であるにも拘わらず、ほとんど問われてこなかった⁽²⁾。

SRTにおける社会的表象とは、どのような発想であるのか。表象はいかなる意味において「社会的」なものとして理解されるのか。この問いにアプローチするために、言説心理学の立場からSRTの理論的展開を眺めてきたR. ハレの議論が考察の出発点を与えてくれる。

ハレは、SRTを含むデュルケム以降の社会的表象研究において、以下の二つの仕方で表象の社会的性格が主張されてきたと言う(Harré 1998)。一つめの方法では、個々の表象を個体の特性や属性として見なしたうえで、それらの多様な表象が、にも拘わらず——集団成員の個別表象が類似しており、実践的目的に関して同一であるという意味で——集団で共有されていることが、社会的表象という言葉で語られる。二つめの方法では、表象は個体の特性や属性ではなく、コミュニティの公的実践の中に存在すると考えられている。「社会的」という言葉をどちらの意味で用いるかによって、社会的表象なるものの実在とそれが人々の行動に及ぼす影響のモード(因果的/規範的)は、異なる仕方で考察される。

ハレは、モスコヴィシを含む多くのSRT研究が個体的な表象の共有という一つめの意味において、「社会的」という言葉を用いていると指摘する。そして自らは、ウィトゲンシュタインに依拠しながら、言説・記号の使用実践として表象を捉え直し、そのような実践の規範的組織化に注目する二つめの方法において社会的表象の発想を展開した。

ハレがSRT研究に下している判定は、SRTの支持者も含めた現在の社会心理学で普及しているSRTに関する理解と評価を反映している。SRTは、人間が特定の社会関係に埋め込まれ、多様な社会的関心を持つ「社会的エージェンシー」であるとの前提から、表象や知識を人々の多様

な（間）主観的関心から切り離すことができないことを主張してきた（eg. Howarth 2006； Jovchelovitch 2007）。だが何人かの論者が指摘するように、そうした主張は、表象を人と世界の間の客観的關係においてのみ理解しようとする狭義の認知観を否定するものの、表象を個体内部で生じる認知現象と見なす伝統的な認知主義的想定を必ずしも否定するものではない（cf. Potter & Edwards 2001）。

しかし、モスコヴィシが『精神分析』（1961=2008）⁽³⁾で、新奇なものや予測不可能なもの——なじみないもの——との遭遇において世界になじみの現れと秩序を回復する「馴致化（familiarization）」の過程について述べる中で提示した社会的表象の発想は、ハレの見立てに反して、個体内的な表象の共有を根拠として表象の社会性を主張する方法を採用するものではなかった。モスコヴィシの発想は、個体の内的表象や公的実践に注目する従来の研究群とは異なる仕方表象の社会的性格を理解する方法を、先駆的に示していたように思われる。

本稿では、ハレが整理した二つの社会的表象の発想との比較を通じて、モスコヴィシの社会的表象の発想を明確にする。この課題にアプローチすることによって、様々な社会的表象研究の中でモスコヴィシのSRT研究が持つ特徴について考えてみたい。

2 社会的表象 I —個体内的な表象の共有—

まず、個体内的な表象の共有として社会的表象を発想する研究がどのようなものか例示するため、現在のSRT研究を牽引する理論家S. ジョヴチェロヴィッチの議論を検討する。

ジョヴチェロヴィッチは、ピアジェやヴィゴツキー、ウィニコットらの社会-発達心理学の伝統を受け継ぐ「表象の発生論的アプローチ」を洗練化することで、SRT研究の理論的基礎づけを試みた（Jovchelovitch 2007）。

発生論的アプローチの最大の特徴は、「自己-他者関係」（自己と他者の相互行為と相互関係の領域）の重視によって、表象を「社会・心理的な歴史を欠いた個人主体の属性として描く研究に対抗する」ところにある（*ibid.*：27）。たとえばピアジェの脱中心化概念は、自己と他者の未分化な状態（依存）から分化した状態（独立）への移行の過程、認知や知識の対象が現在の行為を越えた持続性を獲得する過程として、共通の有意義な対象の構成過程を描く。そこでは、有意義で価値あるものが何かを決めるものがたとえ行為者主体であるとしても、その主体の心と表象そのものは自己と他者の相互行為を通して発展し、その過程に統合的なものとして見なされるといふ。

有意義な対象が構成される社会的表象の過程の発生論的説明を、実際に検討してみよう。

私たちの社会において「赤色」や「人形」、「静かに遊ぶこと」は、女児の外見やふるまいに関連づけられることが多い。幼児は、成長の過程で大人たちとの相互行為を通じて自らの行動を「女の子」の記号として呈示し、それによって他者から一定の反応を喚起することを学習するだろう。このようにして幼児が他者と共有可能な間主観的シンボルを構成するための能力の獲得は、他者のパースペクティブ取得によって可能になる（Jovchelovitch 2007：129）。他者のパースペクティブ取得は、「他者の態度取得」や「視界の相互性」などの社会心理学概念と共に、次の機制を説明する。それは、他者が対象を彼自身にとって有意義なものとして構成するときに適用している同一のパースペクティブを、自己が自らの内部に喚起するための機制である。ここでは、他者の

パースペクティブの内在化を通して、自己が自らの内部で他者と同一の仕方で対象の像を喚起し、その像に反応することができる、間主観的に有意味な対象の構成が可能になるための条件と見なされる。

発生論的説明では、同一または類似の内的表象が個体間で共有される過程が焦点化される。表象が「社会的である」ということで意味されるのは、他者のパースペクティブの内在化の帰結としての、個体内的な表象の共有である。

パースペクティブ取得の機制が示しているように、この社会的表象の発想では、対象の選択的知覚・反応を可能にする固有のパースペクティブを個々人が予め所有していることが、前提とされている。それゆえ、表象と有意味なものが何かを決めるパースペクティブは相互行為の影響に開かれてはいるものの、意味の起源は各々の個体の内部に位置づけられる⁽⁴⁾。態度や記憶に関する認知主義的心理学研究がそうであったように、この発想は、有意味な経験を構造化する原理を個体内部に想定するのである。

3 社会的表象Ⅱ—コミュニティの公的实践—

コミュニティの公的实践に注目して共通に有意味な経験の構成について考察する研究の例として、ウイトゲンシュタイン派エスノメソドロジー（以下、WEM）の研究を取りあげてみたい⁽⁵⁾。

WEMはウイトゲンシュタインによりながら、伝統的な知識社会学研究が表象を個体の内的な現象として捉え、表象と行為を独立した二つの実体・過程として見なしてきたことを、批判した。表象と行為の二段階仮説によることで知識社会学研究は、多様な“正しい表象”の中でどれが共有可能な経験を表象する地位に就くのかを決定する様々な要因を、実践の背後に探求してきた。それに対してWEMは、表象を相互行為やその文脈に埋め込まれたものとして捉えることを主張する。その中で、個人の内的な意識行為に代わる新たな考察の焦点とされてきたのが、人々が他者にとって意味をなす仕方で彼らの行動を組織化する方法である（cf. Coulter 1989）⁽⁶⁾。行動の規範的（社会的）組織化は、それを通じて互いの行為や活動の場面を“説明可能（accountable）”なものとして産出・維持するための成員の手続きであり、かつその手続きを通して構成される活動の文脈の構成要素になっている。この前提からWEMにおいて行動の規範的組織化は、行為と分離不可能な表象の性質を強調するものとして重視されてきた。

公的实践への焦点移行の結果、私たちがあるものを有意味な対象として構成する仕方そのものが規範的評価の対象として扱われることになる。たとえば、ある対象に関する信念を表明する行為は、それを表明する人の内的状態が特定の行為をひき起しているか否かという点で考察されるのではなく、その行為自体が社会的に有意味な仕方で組織化されているか、またその過程を問うために考察される。表象の社会的性格は、実践を背後から導く様々な社会的要因（内在化された価値観や規範を含む）との関係においてではなく、その実践の“表面で”問われるのである（cf. Lynch 1993）。

それゆえWEMでは、様々な因果関係や動機づけによって活動やその帰結を説明することから活動を詳細に記述することへと、研究の目的が再設定される。この方針転換は、過去の研究が説明を指向する中で生み出してきた様々な混乱（論点先取、社会過程のブラックボックス化）を解消するための道筋を示した。しかしそこではまた、ジョヴチェロヴィッチのような理論家たち

が個体に意味の起源を求める前提から探究してきた問い、すなわち有意味で価値あるものが何かに関する人々の合意や一致がいかんして形成されるのかという問いが、この問いに接近する認知主義的ルートとともに事実上、放棄される。WEMによれば、実践が協調的に営まれている限り、対象や相互行為の規則に関する参加者たちの実践的合意が彼らの実践を通してその実践の構成要素として常に表出されているために、いかに懐疑的な社会学者といえども、それらの合意の構成要素や前提を問うことはできない⁽⁷⁾。

4 社会的表象Ⅲ—コミュニケーションにおける分節化—

4.1 馴致化論における「社会的表象」

以下では、モスコヴィシの社会的表象の発想が前述の二つの発想のいずれとも同一視できないことを指摘する。4.1 ではまず、モスコヴィシが“あらゆる表象の目的”として重視する馴致化に関する議論を検討し、彼の社会的表象の発想の骨子を抽出してみよう。

通常、馴致化は、人々にとってなじみないものが既存のものに同化され、共通の社会的対象（なじみあるもの）として構成されることで、集団やコミュニティの秩序が再生産される過程として論じられる。そこで構成される対象の有意味な特徴は、集団やコミュニティに共通の規範によって決定されると考えられてきた。しかしモスコヴィシは、なじみあるものが構成されると同時に、なじみないものが発現する過程として、馴致化を描いた。

精神分析の表象研究でモスコヴィシは、1950年代のフランスの人々にとって疎遠で抽象的だった精神分析が普及し、社会の様々な領域に浸透していく過程と、その過程を通して社会関係に生じた変化を記述した。そこで彼は、次のような現象に注意を促している。馴致化の結果、フロイトの理論に特殊な行動原理であった「欲動」原理は、精神分析について構成された共通の知識やイメージからは削除されていた。他方でこの削除された原理は、性に関係する一連の現象へと注意を喚起することによって、性的なものの禁忌的性質とその悪影響に関する意識を活性化していた（PIP⁽⁸⁾：64）。

モスコヴィシは精神分析のなじみない特性（「性的」）が、馴致化に先行して決定されているとは考えない。「馴致されていない特性は、社会的領域で表象が発生するその瞬間に発現する」（ND⁽⁹⁾：40）。馴致化以前に「性的なもの」を禁忌と見なす共通の規範は存在せず、固有の規範によって結び付けられ、共通の価値への指向性を表出する人々から成る集団やコミュニティも存在しない。

たとえばモスコヴィシは、精神分析の馴致化の過程で「個人の性行動」が新たな注意の対象として構成され、“かつて禁忌であったもの”として現れることを指摘している（PIP：64）。また、規範は、精神分析の多様な表象が洗練化される中で社会関係（eg. 親子間や集団間の対立）が組織化されることによって“翻訳”される様々な葛藤や変化を通して現れるものとして、描かれている⁽¹⁰⁾。人々にとって有意味で価値あるものが何かを決定する基準を与える規範は、その変化や葛藤の知覚を通して、特殊な意味内容と形式を与えられ、歴史的实在性を持つものとして適宜的に構築されるのである。

馴致化論において社会的表象という言葉で描き出されるのは、コミュニケーションの中で、人

と世界が分節化される現象である。まず人と世界の未分化な全体があり、馴致化の結果、人は世界に対してその特定の側面を有意義なものやそうでないものとして評価・判断することのできる主体的位置を占めることができる。

4.2 モスコヴィシの社会的表象研究の特徴

モスコヴィシの馴致化論では、個体の内部に存在する何らかの実体によって人々の経験構成が方向付けられるという見方が否定されている。人々にとって共通に有意義なものや価値あるものが何かを決める規範は、コミュニケーション（＝馴致化）の外部に存在する経験の構造化原理などではない。ここでモスコヴィシは、コミュニケーションの中にのみ構造が存在すると考える見方を、WEM研究と共有している。

では、モスコヴィシの研究とWEM研究の相違は、どのような点にあるのだろうか。

まず、考察対象の範囲の違いがある。WEMでは、経験の構造化原理が実際の行為から切り離されて存在するという見方が否定されるが、各々の相互行為場面で行動の有意義な組織化のための資源として用いられる規範的・文化的パターンの利用可能性は議論の前提とされている。たとえばWEM研究では、質問—応答スキーマや隣接対などの発話や順番の論理的・概念的連関といった経験構成のための文化的資源を上手く利用できる能力を持つことは、成員の資格要件とされており、そのような能力を欠く成員の活動は“説明不可能”なものと思なされるために、考察の対象とはならない。裏返して言えば、個々の相互行為場面を越えたより広い規範的・文化的文脈の成立は、議論の前提とされている。他方、モスコヴィシが焦点化するのは、この広い文脈の生成である。精神分析の馴致化過程で、“翻訳”された変化や葛藤を通して社会に共通の規範が現れてくるように、他の多様な可能性との接続を通して社会生活の一定の秩序の形式が産出される、いわば“文化の創出”がモスコヴィシの考察対象となる。馴致化が、集団の文化的要素が再編される「集合的リフレクション」として特徴づけられるのは、そのためである（PIP：31）⁽¹¹⁾。

さらに重要な点は、モスコヴィシの議論において、これらの規範的・文化的文脈の生成が、集団成員の主観的コミットメントの組織化と相互的な過程として考察されるということである。前述の通りWEMは、有意義で価値あるものが何かに関する人々の合意や一致の形成に関する問いを、この問いに接近する認知主義的ルートとともに、放棄する。実践の参加者たちは皆、その実践が彼らにとって“説明可能”なものとして組織化されている限りで、そこで現実化される文脈（および特定の世界像）に対して、コミットメントを表出していると思なされるためである。だがこうした想定は、コミットメントの種差を説明せず、認知心理学にその説明を委ねるものだろう。他方、モスコヴィシの議論では、規範的・文化的文脈の生成と成員のコミットメントの組織化が同一の過程として考察されている。精神分析が共通の社会的対象として構成されることを通して、規範の変化や葛藤の知覚が組織化され、変化や葛藤の翻訳により規範が相対化されることを通して、歴史的実在性を持つものとして共通の規範が現れてくる。モスコヴィシは『精神分析』の第二部で提示したコミュニケーション様式の分析で、この発想を展開している。この分析で彼は、集団が精神分析の特殊な知識やイメージを洗練化するコミュニケーションを通して、集団の共通のリアリティに対する成員たちのコミットメントが多様な仕方で組織化されることを示した。この分析ではまた、コミットメントの多様な組織化と関連するものとして、共通の知識が

集団にとって機能する——共通の知識が集団のリアリティを表象する上での正当性を得る——様々な様式が提示・分類されている（eg. 多様な価値や世界観の併存や階層的秩序化に適合的なコミュニケーションの促進、特定の行為の喚起）。

モスコヴィシの研究と WEM 研究を区別するこれらの相違点は、構造に関する見解とともに、「コミュニケーションの中で人と世界の分節化が生じる」という先に提示した発想から導かれる、モスコヴィシの SRT 研究のアプローチの特徴を示している。モスコヴィシは、共有可能な経験の範囲を制約する規範的・文化的文脈の生成とその文脈に対する人々の主観的コミットメントの組織化を可能にすることで、集団の「社会行動を形成し、コミュニケーションを方向づける過程に寄与する」機能を持つものとして、社会的表象を提示した（PIP：30）。この発想において表象が「社会的である」ということは、表象が人々の行為に構造と指向性を与えることで“集団的行為を形成する”機能を持つことを意味している。

5 結語

本稿では、個々の私的な表象の共有と公的实践への表象の埋め込みにそれぞれ注目する既存の研究群との比較を通して、モスコヴィシの社会的表象の発想を明確にしてきた。モスコヴィシの馴致化論は、個人の心の中に経験の構造化原理を想定する認知主義的議論とは異なり、コミュニケーションの中のみ、そうした構造がありうるという見方を提示する。また、公的实践への表象の埋め込みを主張する議論が焦点化する相互行為場面を越えた、より広い規範的・文化的文脈の生成に焦点をあてたうえで、これらの文脈の生成を成員の主観的コミットメントの組織化と相互的に進行する過程として描き出している。こうした研究視角は、「コミュニケーションの中で人と世界の分節化が生じる」現象として、社会的表象が発想されることに由来している。この発想において表象が「社会的である」ということは、共有可能な経験の範囲を制約する規範的・文化的文脈の生成とその文脈に対する人々の主観的コミットメントの組織化を可能にすることで、表象が構造と指向性を備えた“集団的行為を形成する”機能を持つことを意味する。

モスコヴィシの SRT 研究の最大の特徴を一言で表現すれば、次のようになるだろう。それは彼の研究が、認知主義的な還元論とは異なる仕方で、「心理的なもの」や「主観的なもの」が集団的現象の成立において担う理論的役割を積極的に認めるということである。こうした見解は、社会科学的な表象研究が一般に、集団的現象の心理学的説明を否定する傾向があることから考えれば、逆説的に見える。しかし、権力や集団毎/間の関心や価値の構造が存在しても、人々を集団的行為に参加する能動的成員に変え、世代を超えて受け継がれる共通の文化に個人を結びつけるものがなければ、社会は存在しない⁽¹²⁾。このように考えたモスコヴィシにとって、心理や主観性への言及は、集団的現象の説明のために忌避すべきであるどころか、不可避であった。

集団的現象の考察において心理や主観性といったものが占める位置づけを再考する必要がある。モスコヴィシの研究は、そのための理論枠組を与えてくれる。この見地から、表象と社会をめぐる特定の想定に基づき発展してきた知識の多元性論を検討素材として、集団的現象を捉える新たなビジョンを提示し、展開することを、次の課題にしたい。

注

- (1) cf. Sugiman, Gergen, Wagner, & Yamada (2008)
- (2) 社会的表象の概念的な不明瞭性を指摘する内外からの批判に応えるかたちで、90年代には発生論的観点から提出された自己—他者—対象の三者関係からなる表象の定義（2節）に基づき、個人と社会の相互的關係を扱うものとしてSRTの問題枠組が定式化された（cf. Voelklein & Howarth 2005）。だが、この枠組を通して提示される議論は、“社会的要因以外の”個人的・主観的要因が経験構成過程に介入することの指摘に終始しがちであり、表象の社会的性格がいかなる論理に基づき主張されるのかという点は不問にふされる傾向がある。
- (3) 『精神分析』はモスコヴィシのSRT研究における最初の理論的・経験的著作であるが、英訳版の公刊がオリジナルの仏語版の公刊（1961）に半世紀ほど遅れたために、SRTの英語圏における理解と受容は長い間、既存の社会学・心理学理論の枠組の中で進められてきた。ハレの論文でも『精神分析』が参照された形跡はない。
- (4) しかしこの（広義の）認知主義的前提の保持は、ジョヴチェロヴィッチの眼には回避されるべき問題とは映らなかったようである。発生論的観点からSRTを基礎づける上での彼女の関心は、ポストモダン派の社会心理学研究に代表される（心的）表象概念の現代的放棄に対して、個々の“私的で内的な”表象もまた相互行為的に構成されることを再主張するところにあったためである（Jovchelovitch 1996）。
- (5) WEM研究では社会的表象という言葉は用いられていない。しかしWEM研究の分析対象とその対象に注目する際に適用される論理は、ハレの議論と同一であり、かつ明確に提示されているため、二つめの社会的表象の発想の典型例を示すものとして、ここで検討することは妥当であると考えられる。
- (6) たとえばエスノメソドロジーの「行為の継起的組織化」や会話分析の「隣接対」の概念は、ある行動と他の行動が時間的な前後関係にあることが分かたり（eg. 質問—応答）、発話や順番の論理的・概念的連関や、行動のカテゴリー化とそれに関する推論がどのようになされるかが分かるならば、行動が有意な仕方では組織化されていると言えることを提示する（Garfinkel & Sacks 1970; Sacks 1972-1989）。
- (7) cf. Button&Sharrock (1993 : 16); Lynch (1993 : 178)
- (8) PIP: Moscovici S. 1961. *La psychanalyse: Son Image et Son Public*. Paris: Press Universitaires de France. (= 2008. *Psychoanalysis: Its Image and Its Public*, Cambridge & Malden: Polity.)
- (9) ND: Moscovici, S. 1988. Notes towards a Description of Social Representations, *European Journal of Social Psychology*, 18: 211-50.
- (10) 「極めて多くの物質的・社会規範的な葛藤を翻訳可能にすることで、その〔精神分析の〕表象は、私たち皆が共有している広い環境に科学的な起源を持つ原材料を埋め込む」（PIP : 31）
- (11) 集合的リフレクションの過程であるために馴致化では、人々は世界になじみの現れを回復するだけでなく、予期すらしなかった新たな問いに直面し、それまではただ反応すれば良かったはずのものに主体的選択を迫られるようになる（PIP : 52）。
- (12) cf. Moscovici (2000)

参考文献

- BUTTON, G. & SHARROCK, W. 1993. A Disagreement over Agreement and Consensus in Constructionist Sociology, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 23:1-25.
- COULTER, J. 1989. *Mind in Action*, Cambridge: Polity.

- GARFINKEL, H. & SACKS, H. 1970. On Formal Structures of Practical Actions, in Mckinney, J. C. & Tiryakian, E. A. eds., *Theoretical Sociology*. New York: Appleton- Century- Crofts, pp. 338-66.
- HARRÉ, R. 1998. The Epistemology of Social Representations. in Flick, U. ed., 1998. *The Psychology of the Social*. Cambridge: Cambridge University Press.
- HOWARTH, C. 2006. A Social Representation is not a quiet thing: Exploring the Critical Potential of Social Representations Theory. *British journal of social psychology*, 45(1): 65-86.
- JOVCHELOVITCH, S. 1996. In Defence of Representations, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 26 (2) :121-33.
- 2007. *Knowledge in Context: Representations, Community and Culture*. New York: Routledge.
- LYNCH, M. 1993. *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, New York: Cambridge University Press.
- MOSCOVICI, S. 1961. *La Psychanalyse: Son Image et Son Public*. Paris: Press Universitaires de France. (= 2008. *Psychoanalysis: Its Image and Its Public*, Cambridge & Malden: Polity.)
- 1988. Notes towards a Description of Social Representations, *European Journal of Social Psychology*, 18: 211-50.
- 2000. The History and Actuality of Social Representations, in Moscovici, S. & Duveen, G. eds., *Social Representations: Explorations in social psychology*, Cambridge: Polity, pp. 120-155.
- POTTER, J. & EDWARDS, D. 2001. Discursive Social Psychology, Robinson, W. P. & Giles, H. (eds.), *The New Handbook of Language and Social Psychology*, Chichester: John Wiley & Sons, pp. 103-118.
- SACKS, H. 1972. An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology, in Sudnow, D. (ed.), *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, pp. 31-63. (= 1989. 北澤裕・西阪仰 (訳) 「会話データの利用法：会話分析事始め」北澤・西阪編訳『日常性の解剖学』マルジュ社, 東京, 93-173).
- SUGIMAN, T., GERGEN, K. J., WAGNER, W., & YAMADA, Y. 2008. *Meaning in Action: Constructions, Narratives, and Representations*, Springer.
- VOELKLEIN, C. & HOWARTH, C. 2005. A Review of Controversies about Social Representations Theory: A British Debate. *Culture & Psychology*, 11 (4) : 431-454.

[査読を含む審査を経て、2013年10月29日掲載決定]

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)